

## 『父親の保障』

エッセイスト 風間佳

父親がいない母子家庭の平均年収は、  
父親がいる家庭（父子家庭を含む）の平均年収の約3分の1の収入しかないそうだ。  
収入の差は子供の進学問題を直撃する。母子家庭の大学への進学率はかなり低い。

母子家庭の収入の低さは、  
子供を抱えた母親が高収入を得ることがいかに難しいかを物語っている。  
子供が小さければ、なかなかフルタイムでは働けない。  
子供の病気や学校の行事で、早退、遅刻、欠勤も何度となくあるだろう。  
子供を残して、出張や残業も難しい。  
そういった理由で、優秀であっても重要なポストにはつけない。  
それ以前に、一端家庭に入った女性の社会復帰の場はただでさえ少ないのだから、  
子供を抱えた母親が正社員として採用されること自体が難しい。  
したがって子供を抱えた母親の収入は低くなってしまう。

よく「父親の死亡保障はいくら必要なのだろうか」という話があるが、  
1,000万円あっても、年収500万円だとしたらたったの2年分の金額でしかない。  
現在、年収500万円ですり繰りしている家庭では、  
1,000万円は2年で使い切ってしまう金額だということだ。  
2,000万円あっても、年収500万円の4年分。3,000万円ですり繰りして6年分。  
5,000万円ですり繰りして、年収500万円の10年分になる。

宝くじで当たる1,000万円は大金に見えるが、  
父親の収入の代わりに1,000万円は何と心細く見えることだろうか。  
父親なき後、母親が子供を抱えて収入を得ることの難しさを考えると、  
父親の死亡保障はそれなりの額が必要なのだと思う。

E1C-0039-hosho

